

2025年12月07日（日）13:00 - 13:50（センター棟405）

日本青年心理学会第33回大会（国立オリンピック記念青少年総合センター）  
OP2-H1

# 同性友人関係における状況に応じた切替の類型別の、 孤独感（LSO）, アタッチメント・スタイル, 多様性志向の比較

第2版（2025年12月06日：図表配置のズレを修正）

大谷 宗啓<sup>1, 2</sup>・若松養亮<sup>2</sup>

<sup>1</sup>兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科・<sup>2</sup>滋賀大学

[m-ohtani@edu.shiga-u.ac.jp](mailto:m-ohtani@edu.shiga-u.ac.jp)



# はじめに

- 報告者（大谷）は網膜色素変性症のため、遮光眼鏡を装用したままで失礼します。
- 発表論文集の文末「（注記）結果の詳細は当日資料として以下のURLに掲載予定である」につきまして。  
→準備委員会の共有ドライブに発表資料PDFを格納する方式になったことを受けて、リンク用webページの設置は取り止め、発表資料PDF内にハイパーアリンクを埋め込みました。



# この時間枠の予定

## (1) 研究報告 …25分間前後

- ・ 本研究の経緯, 問題意識, 検討課題
- ・ 大学生・成人・高齢者を回答者とした調査報告

## (2) 懸案 …5分間前後

- ・ 調査結果の解釈と（青年・支援者への）説明について
- ・ 標本集団の偏り（？）について

## (3) 議論 …20分間前後

# 「状況に応じた切替」

友人関係において、状況に応じて関係対象や自己のあり方を切り替えること（大谷, 2007, 2019）

対象切替 …関係対象（友人）を切り替えること

ex. 「どこに何をしに行くかによって、最初に誘う友人は違う」

自己切替 …自己のあり方（自己概念）を切り替えること

ex. 「どんな友人と一緒にいるかによって、自分のキャラ（性格）が変わる」

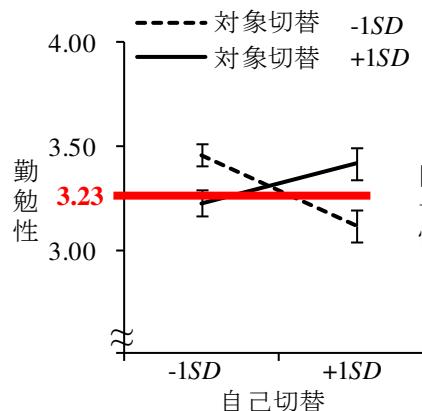
希薄化論（疎隔的・部分的な関係にとどめる、表面的で円滑な関係を求める傾向が高まっているのでは？という懸念）と、選択化論（状況や気分に応じて複数の相手・複数の自己を使い分ける柔軟さなのでは？という主張）の両方が注目した行動。

# 心理社会的発達との関連 (大谷他, 2024)

[https://doi.org/10.20688/jsyap.36.1\\_5](https://doi.org/10.20688/jsyap.36.1_5)

Figure 1

対象切替×自己切替と勤勉性の関連 (大谷他, 2024)

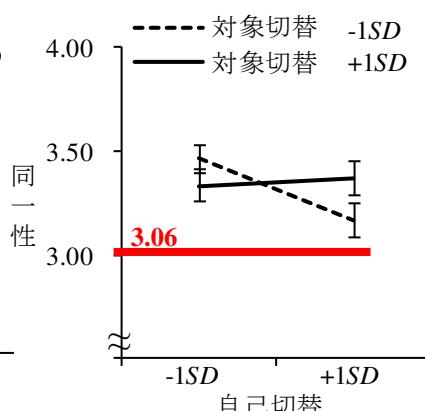


注) エラーバーはSEを表す。

注) 赤線以下は発達のアセスメントで問題となる範囲の値

Figure 2

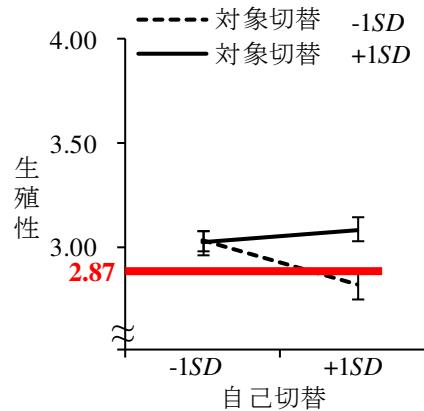
対象切替×自己切替と同一性の関連 (大谷他, 2024)



注) エラーバーはSEを表す。

Figure 3

対象切替×自己切替と生殖性の関連 (大谷他, 2024)



注) エラーバーはSEを表す。

- ・片方を偏用している者は、心理社会的発達の主題得点が低い。
- ・勤勉性・生殖性では相対的に低いだけではなく、発達のアセスメントで問題となる範囲の値に入る。

- ・大学生・成人で共通。

対象切替・自己切替の片方を偏用している者は、心理社会的発達に問題を抱えている or 抱えると考えられる

標本平均値ではなく評定語の中性値を群分け基準として、

状況に応じた切替の4類型



# 不使用型・両用型は問題ない？



大谷他 (2024) の結果に基づくならば、そう。

→ならば、友人関係に悩む青年への助言としては「不使用型の推奨」が適当か？

切り替えない方が負担感が少ない（大谷, 2019）し、  
シンプルで分かりやすい（助言しやすい）ため。

しかし、本当に不使用型は「問題ない」のか？

確かに、切り替えない者は発達主題得点の高さを示す（e. g. 藤野, 2023;  
木谷・岡本, 2018; 大谷他, 2024）

しかし“青年期の友人関係”としては、不使用型（=関係対象（友人）も自己のあり方（活性化する自己概念）も固定的な者）が、発達主題得点の高さを伴うのは、不思議なことなのではないか？

# 青年期の友人関係

高校生から大学生頃には、パーソナリティの多面性と変動性、および、同じ言動であっても相手によって受け取り方が異なるという多義性の理解が進む（中瀬古・谷村. 2002）

自他即融的な関係性から、互いを個として認め異質性を尊重し合う関係性へと発達的に移行するものであり、異質な他者との出会いが、他者と相互作用する存在としての自己を形成する（中間, 2014）



自己切替

青年期中期（高校生頃）以降の友人関係は、複雑で動的な自他理解の下での動的な調整の場である

…のに、対象切替も自己切替もしない不使用型（÷どうやって調整しているのか？）の発達主題得点が高いのは何故か…？

# 2023年度調査での検討（投稿準備中）



「不使用型は、人間の個別性への気づきが弱いのではないか？」

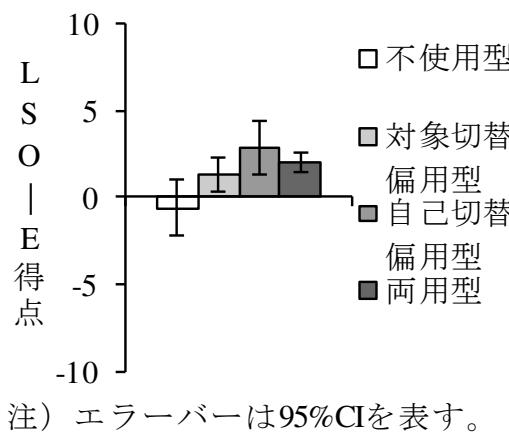
そのため、相互調整の必要に気づかず、実行せず、それでも“うまく折り合えている”と感じられているのでは？

人間の個別性への気づきが弱い者が、強い者と同等以上に高い発達主題得点を示した研究は既にある（e.g. 後藤・松島, 2002）

→大学生331名の回答を得て検討。

Figure 4

切替4類型別のLSO-E得点



人間の個別性への気づきを表すLSO-E得点

（落合, 1983）：不使用型 < 自己切替偏用型・両用型

不使用型の平均値は中性点（±0）未満。

不使用型の人間観はナイーブ。ナイーブだと悪いという訳ではないが、敢えて推奨するものではない

# 今回の検討課題



LSO-E得点の平均値は年齢層と共に上がる  
(小林, 2006; 宇都宮, 1999)

- 切替類型間で差が見られるのは大学生（以前）のみで、高年齢層になれば、どの切替類型でも高得点なのでは？

→LSO-E得点に対する切替類型×年齢層の交互作用（仮説1）

- 踏み込んだ付き合いを避けたければ、調整は必要ないのでは？  
→不使用型はアタッチメント行動の回避得点が高い（仮説2）
- 友人たちの多様性が低ければ、動的な調整は必要ないのでは？  
→不使用型は友人たちの多様性を求めていない（仮説3）

# 方 法

## 調査の概要

2024年12月～2025年1月にweb調査を実施。調査会社の登録モニターである大学生・30歳代・50歳代・70歳代×男・女の8群各400名から回答を得た。

不良回答を除外後、最少人数の30歳代男性に揃えて8群各193名を乱数生成により抽出し、分析対象とした。

## 調査の内容

- 状況に応じた切替尺度多年齢対応版 (SCSM:大谷・若松, 2025)
- LSO (落合, 1983) : 原論文の項目12と項目13を除外して使用。 
- アタッチメント指標 : 児童版ECR-RS-GO (中尾, 2018) : 項目文中の「人」に「友人」を代入して使用。
- 多様性志向 : 「色々なタイプの友人と付き合いたい」の単項目測定。「あてはまる」 (5点) ~ 「あてはまらない」 (1点) の5件法

# 結果：切替4類型の人数分布

Table 1

切替4類型の人数分布

		1. 不 使 用 型	2. 対 象 切 替 偏 用 型	3. 自 己 切 替 偏 用 型	4. 両 用 型	5. 分 類 不 能	上段 $\chi^2(4)$	下段 ES:w	Holm法による 多重比較
大学生	男性 (n=193)	n %	25 13.0%	26 13.5%	11 5.7%	90 46.6%	41 21.2%	97.23 0.71	*** 1・2・3・5<4
	女性 (n=193)	n %	28 14.5%	43 22.3%	8 4.1%	82 42.5%	32 16.6%	77.60 0.63	*** 3<1・2・5<4
30歳代	男性 (n=193)	n %	27 14.0%	47 24.4%	12 6.2%	65 33.7%	42 21.8%	42.00 0.47	*** 3<2・4・5, 1<4
	女性 (n=193)	n %	39 20.2%	50 25.9%	5 2.6%	62 32.1%	37 19.2%	46.87 0.49	*** 3<1・2・4・5
50歳代	男性 (n=193)	n %	41 21.2%	64 33.2%	4 2.1%	45 23.3%	39 20.2%	48.94 0.50	*** 3<1・2・4・5
	女性 (n=193)	n %	31 16.1%	90 46.6%	3 1.6%	45 23.3%	24 12.4%	109.36 0.75	*** 3<1・4・5<2, 5<4
70歳代	男性 (n=193)	n %	35 18.1%	82 42.5%	2 1.0%	39 20.2%	35 18.1%	84.18 0.66	*** 3<1・4・5<2
	女性 (n=193)	n %	28 14.5%	117 60.6%	3 1.6%	32 16.6%	13 6.7%	213.09 1.05	*** 3<5<1・4<2
全体 (N=1544)		n %	254 16.5%	519 33.6%	48 3.1%	460 29.8%	263 17.0%	453.90 0.54	*** 3<1・5<2・4

注) 各群は $w \geq .25$ で $1-\beta \geq .80$ , 全体は $w \geq .09$ で $1-\beta \geq .80$ 。多重比較は5%水準で有意な結果を示した。

\*\*\*  $p < .001$

対象切替偏用型の割合がかなり多い。

大谷他 (2024) では15.2%~34.8%

自己切替偏用型の割合がかなり少ない。

大谷他 (2024) では2.5%~22.8%

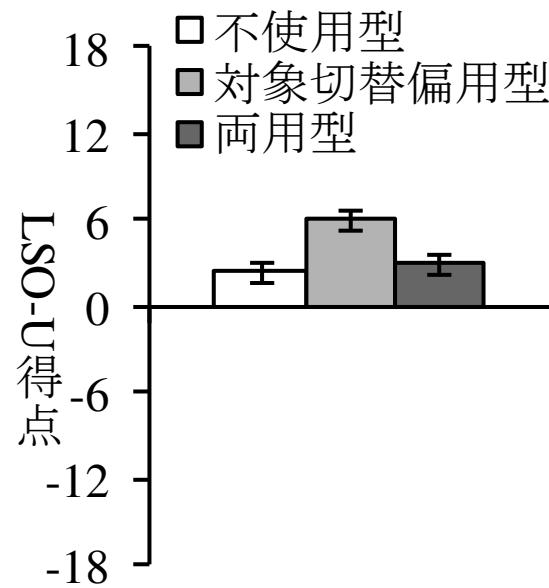
自己切替偏用型は以降の分析から除外した。

(分布の偏りについては後述)

# 結果：LSO得点の比較

Figure 5

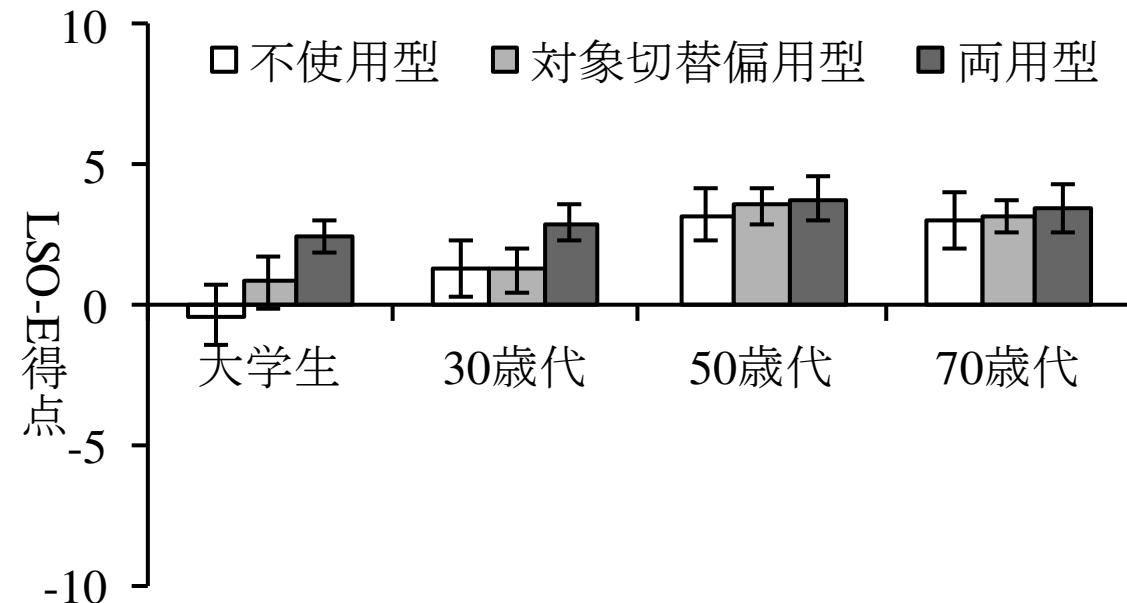
切替類型別のLSO-U得点



注) エラーバーは95%CI。

Figure 6

切替類型別のLSO-E得点



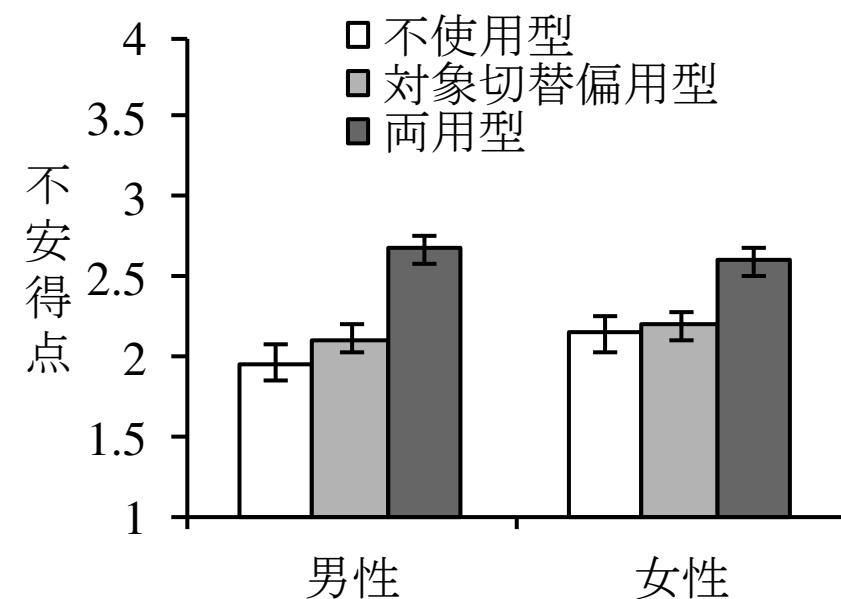
注) エラーバーは95%CI。

**LSO-U** (人間の理解・共感の可能性についての感じ（考え方）) :不使用型・両用型 < 対象切替偏用型。全て中性点 ( $\pm 0$ ) 超。**LSO-E** : 切替類型  $\times$  年齢層の交互作用 ( $F(6,1209)=2.14, p=.046$ ) 。大学生と30歳代で不使用型・対象切替偏用型 < 両用型。不使用型の大学生は中性点 ( $\pm 0$ ) 未満。 **仮説1を支持**

# 結果：アタッチメント指標の比較

Figure 7

切替類型別の不安得点



注) エラーバーは95%CI。

不安：切替類型×性の交互作用が有意 ( $F(2,1209)=3.26, p=.039$ )。

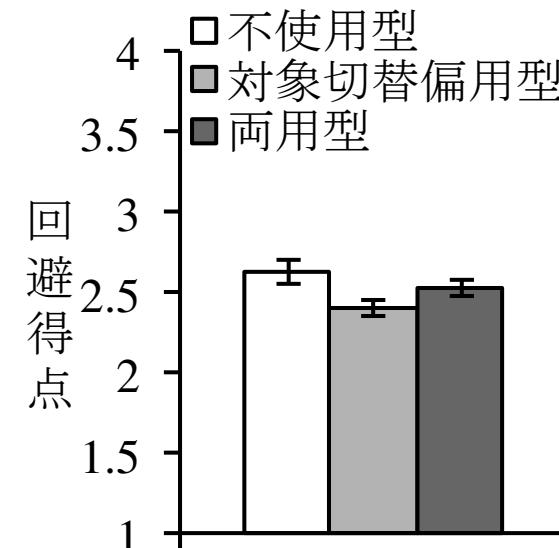
男性で不使用型 &lt; 対象切替偏用型 &lt; 両用型,

女性で不使用型・対象切替偏用型 &lt; 両用型。両用型は中性点(2.50)超。

回避：対象切替偏用型 &lt; 両用型 &lt; 不使用型。不使用型は中性点(2.50)超。

Figure 8

切替類型別の回避得点



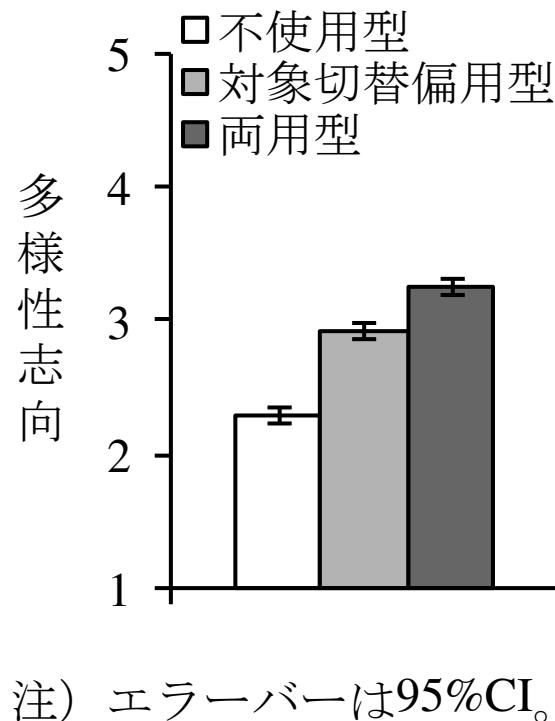
注) エラーバーは95%CI。

仮説2を支持

# 結果：多様性志向の比較

Figure 9

切替類型別の多様性志向



注) エラーバーは95%CI。

多様性志向：不使用型 < 対象切替偏用型 < 両用型。  
 不使用型は中性点（3.00）未満。 仮説3を支持

## 考察：仮説検討の結果

仮説1：LSO-E得点（人間の個別性への気づき）  
 に対する切替類型×年齢層の交互作用

仮説2：不使用型はアタッチメント行動の回避得点が高い

仮説3：不使用型は友人たちの多様性を求めていない

→仮説1～3の全てが支持された。

# 考察：各類型の特徴



## 不使用型 (仮説検討対象の類型)

不安が低く回避が高い拒絶型「的」な特徴と、多様性志向の低さ。大学生では人間の個別性への気づきの弱さ。

(成人・高齢者も含めて) 踏み込みます・拡げずで社会適応している…?

## 両用型 (不用型と何が違う?)

不安の高さと、多様性志向の高さが特徴。大学生では人間の個別性への気づきの強さ。両用型の方がオーソドックスな青年観に近い…?

## 対象切替偏用型

不安も回避も低い安定型「的」な特徴。  
但し発達主題得点は高くない(大谷他, 2024)

## 自己切替偏用型

(少人数のため分析除外。なぜこれほど少なかったのか?  
→後述)

# この時間枠の予定

## (1) 研究報告 …25分間前後

- ・本研究の経緯、問題意識、検討課題
- ・大学生・成人・高齢者を回答者とした調査報告

## (2) 懸案 …5分間前後

- ・調査結果の解釈と（青年・支援者への）説明について
- ・標本集団の偏り（？）について

## (3) 議論 …20分間前後

# 懸案：結果の解釈と説明について

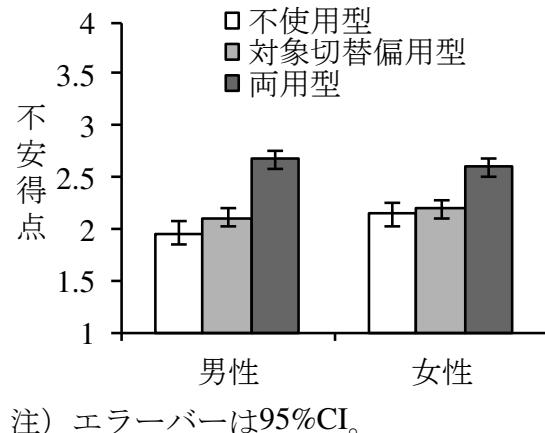
不安得点・回避得点を、中性値未満／超で「高い／低い」と解釈  
また「拒絶型『的』な特徴」等と表記し、愛着4類型への当て嵌めを避けた。

- ECR-RS-GOはカットオフ値が不明。
- 想定する相手（今回は友人）によっても違うのでは？
- 特徴の説明には、中性値未満／超が分かりやすい。

…とはいえ、当事者や支援者に「それって適応的な状態を示す値なの？  
それとも不適応なの？」と尋ねられた場合、どう答えるのが適当か？

Figure 7

切替類型別の不安得点



例えば…

不安得点1.96（「どちらかと言えばあてはまらない」未満）は適応的なのか？

親子関係や恋愛関係に比べて参入・離脱が比較的容易な友人関係においては、その値は拒絶のサインに鈍感  
≒不適応的であることを示すようにも…？

# 懸案：標本集団の偏り（？）

Table 2

対象切替と自己切替を従属変数とし、年齢層・性を要因とした個人間2要因分散分析 ( $N=1544$ )

年齢層	男性	女性	要因の効果		Holm法による多重比較	
	$M$ ( $SD$ )	$M$ ( $SD$ )	$F$ 値	ES:f		
対象切替 (1 - 5)	大学生	3.53 (0.80)	3.60 (0.87)	年齢層	4.65 **	0.10 30歳代 < 70歳代
	30歳代	3.42 (0.80)	3.41 (0.97)	性	10.92 ***	0.08 男性 < 女性
	50歳代	3.35 (0.92)	3.65 (0.89)	交互作用	2.54	0.07
	70歳代	3.53 (0.90)	3.76 (0.85)			
自己切替 (1 - 5)	大学生	3.21 (0.82)	3.18 (0.90)	年齢層	75.81 ***	70歳代 < 50歳代 < 30歳代 < 大学生
	30歳代	2.93 (0.90)	2.71 (0.99)	性	8.60 **	0.07 女性 < 男性
	50歳代	2.46 (1.02)	2.41 (0.97)	交互作用	1.52	0.05
	70歳代	2.40 (0.91)	2.15 (0.91)			

注) 指標得点名の括弧内は得点可能範囲。年齢層の主効果と交互作用は $ES:f \geq .08$ で $1-\beta \geq .80$ 、性の主効果は $ES:f \geq .07$ で $1-\beta \geq .80$ 。多重比較は5%水準で有意な結果を示した。

\*  $p < .050$    \*\*  $p < .010$    \*\*\*  $p < .001$

先行研究では、自己切替（に相当する変数）の得点は天井効果が推認される程高いのが通例。それらに比べると今回は低い。

そのため、自己切替偏用型がかなり少なかった。

同じ項目文同士で比較しても低い。なお、年齢層差は先行研究と整合。

## 懸案：標本集団の偏り（？）

先行研究におけるLSO-U得点（人間の理解・共感の可能性…）は…

- ・大谷（投稿準備中）：大学生327名,  **$M=9.36 (SD=6.45)$**
- ・後藤・松島（2002）：大学生231名,  **$M=8.70 (SD=6.28)$**
- ・野上他（2000）：大学生・短期大学生・専門学校生525名,  **$M=8.60 (SD=6.67)$**

今回は…大学生～高齢者1,544名,  **$M=3.62 (SD=6.41)$** ,

大学生限定386名,  **$M=3.07 (SD=5.98)$**  …低い…。

今回の標本集団は、自己切替得点が低く、LSO-U得点が低い。  
何らかの偏りがあった？

なお、自己切替得点とLSO-U得点の相関はマイナス .20,  $p<.001$

大谷（投稿準備中）でもマイナス .16,  $p=.003$

一方が低得点に偏ったから他方も低得点になっただけ、ではない。

# 引用文献・使用した統計ツール\_1

Faul, F., Erdfelder, E., Lang, A-G., & Buchner, A. (2007). G\*Power 3: A flexible statistical power analysis program for the social, behavioral, and biomedical sciences. *Behavior research methods*, 39, 175-191.  
<https://doi.org/10.3758/BF03193146>

藤野 遼平 (2023). 多元的自己を持つ青年の具体像と発達的観点について——亀田氏・三好氏のコメントに対するリプライ—— 青年心理学研究, 34(2), 97-100.  
[https://doi.org/10.20688/jsyap.34.2\\_97](https://doi.org/10.20688/jsyap.34.2_97)

後藤 佳代子・松島 恭子 (2002). 青年期後期における孤独感の発達に関する一考察——自我同一性の観点から—— 大阪市立大学生活科学部紀要, 49, 93-100. <https://ocu-omo.repo.nii.ac.jp/records/2015429>

木谷 智子・岡本 祐子 (2018). 自己の多面性とアイデンティティの関連——多元的アイデンティティに注目して—— 青年心理学研究, 29(2), 91-105.  
[https://doi.org/10.20688/jsyap.29.2\\_91](https://doi.org/10.20688/jsyap.29.2_91)

小林 邦雄 (2006). 大学生における孤独感と同一性の混乱——ひとつのケース・スタディ—— *Memoirs of the School of Biology-Oriented Science and Technology of Kinki University*, 17, 63-78. <https://kindai.repo.nii.ac.jp/records/5667>

中間 玲子 (2014). 青年期の自己形成における友人関係の意義 兵庫教育大学研究紀要, 44, 9-21. <http://hdl.handle.net/10132/11054>

中尾 達馬 (2018). 児童期・青年期・成人期のアタッチメント 発達, 153, 36-41.

中瀬古 きぬ恵・谷村 覚 (2002). 子どもの視点構造とアンビバレンス理解(第4報)  
——Selman理論の検証と展開—— 人間関係論集 (大阪公立大学), 19, 89-116.  
<http://doi.org/10.24729/00011281>

野上 康子・天谷 祐子・太田 伸幸・栗田 統史・布施 光代・西村 萌子・長谷川 美佐子・  
胡 琴菊 (2000). 青年期の“孤独感”を測定する尺度の作成 名古屋大学大学院教育  
発達科学研究科紀要心理発達科学, 47, 247-268.  
<https://doi.org/10.18999/nupsych.47.247>

落合 良行 (1983). 孤独感の類型判別尺度 (LSO) の作成 教育心理学研究, 31(4), 332-  
336. [https://doi.org/10.5926/jjep1953.31.4\\_332](https://doi.org/10.5926/jjep1953.31.4_332)

大谷 宗啓 (2019). 大学生にとって友人関係における状況に応じた切替とはどのような体験なのか——自由記述と半構造化面接によるボトムアップアプローチ—— 滋賀大学教育学部紀要, 68, 99-113.  
<http://hdl.handle.net/10441/00015756>

大谷 宗啓・渡部 雅之・若松 養亮 (2024). 大学生・成人の心理社会的発達と同性友人関係における対象切替・自己切替・対人ストレッサー経験頻度の関連——対象切替と自己切替の交互作用に着目する必要性—— 青年心理学研究, 36(1), 5-29.  
[https://doi.org/10.20688/jsyap.36.1\\_5](https://doi.org/10.20688/jsyap.36.1_5)

大谷 宗啓・若松 養亮 (2025). 同性友人関係における状況に応じた切替尺度多年齢対応版 (SCSM) の開発 日本心理学会第89回大会発表論文集, (web発表)  
<https://re2.sakura.ne.jp/ohtani/jp/jpa89th.pdf>

清水 裕士 (2016). フリーの統計分析ソフトHAD——機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案—— メディア・情報・コミュニケーション研究, 1, 59-73. <http://hdl.handle.net/11150/10815>

宇都宮 博 (1999). 高齢者の配偶者との関係性ステータスと孤独感——モラールとの関連性—— 日本家政学会誌, 50(1), 5-10. <https://doi.org/10.11428/jhej1987.50.5>



# 「友人」の範囲と「キャラ」の意味の限定

**大問1：**「今現在、あなたが一緒におしゃべりをしたり、何かをするような同性の友人（直接会ったことが一度もない友人は除く）の内、今、具体的に思い浮かべられる友人は何名ぐらいおられますか。思い浮かべられる友人だけを数えて、テキストボックスに整数でご回答ください。」

**大問2：**「あなたの、同性の友人たち（大問1で思い浮かべた友人たち。以下の質問でも同じです）との付き合い方で、各項目はどれぐらいあてはまりますか。なお、項目文中の「キャラ」とは、「熱血」、「クール」、「陰気」、「真面目」、「お調子者」などの人物像・自己イメージのことです。」



Table 3  
新規尺度の各項目の記述統計量と弱測定不变モデルの標準化パス係数

	M (SD)		大学生		30歳代		50歳代		70歳代	
			男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性
	F1	F2	F1	F2	F1	F2	F1	F2	F1	F2
F1: 対象切替 (4項目, $\alpha=.80$ )										
01. どこに何をしに行くかによって、最初に誘う友人は違う。	3.66 (1.13)	.67	—	.66	—	.63	—	.60	—	.60
03. 相談内容によって、どの友人に相談するかを選ぶ。	3.64 (1.11)	.74	—	.69	—	.72	—	.70	—	.71
07. 話したい内容によって連絡する（話をする）友人が違う。	3.49 (1.13)	.78	—	.74	—	.81	—	.75	—	.79

大谷 宗啓・若松 養亮 (2025). 同性友人関係における状況に応じた切替尺度多年齢対応版 (SCSM) の開発 日本心理学会第89回大会発表論文集, (web発表) <https://re2.sakura.ne.jp/ohtani/jp/jpa89th.pdf>

のキャラが変わる。											
06. その場の雰囲気によって自分のキャラが変わる。	2.65 (1.19)	—	.73	—	.76	—	.76	—	.80	—	
08. 頼みごとをしたい、相手をなぐさめたいなど、その時の場面によって自分のキャラが変わること。	2.74 (1.17)	—	.70	—	.70	—	.74	—	.72	—	
10. その場で求められていそうなキャラに変わる。	2.56 (1.17)	—	.70	—	.70	—	.75	—	.69	—	
12. 話す友人によって、相手に対する自分のキャラが変わることがある	2.64 (1.18)	—	.81	—	.75	—	.81	—	.80	—	
	因子間相関	.60	***	.53	***	.38	***	.53	***	.32	***
	年齢層・性別にみた下位尺度得点の $\alpha$ 係数	.78	.83	.77	.86	.76	.88	.81	.90	.81	.94

(除外項目)

05. 機嫌の良い日と悪い日とでは、一緒にいたい友人が違う。	2.65 (1.16)	—	—	—	—	—	—	—	—	—
11. 場合に応じて、いろいろな友人とつきあうことが多い。	2.79 (1.19)	—	—	—	—	—	—	—	—	—

注) 各項目の得点可能範囲は1-5。各項目への標準化パス係数は全て0.1%水準で有意であった。

<sup>†</sup>  $p < .100$  <sup>\*\*</sup>  $p < .010$  <sup>\*\*\*</sup>  $p < .001$

拡大してご覧ください。



想定通り因子間相関には年齢層差 → 弱測定不变モデルを採用。

年齢層・性別の $\alpha$ 係数は.76~.94 (Table 3青枠内)

評定平均値を使用可能な内的整合性を備える



# 大学生調査は18歳から22歳の4年制大学生を対象とした。

Table 1

回答者数・有効回答者数と抽出後の分析対象者数・平均年齢・就業状態

年齢層	性	回答者数	有効回答者数	n	分析対象者						他・不明
					年齢		就業状態(%)				
								家事専業	大学生	無業	
大学生	男性	400	288	193	20.60 (1.18)	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%
	女性	400	293	193	20.67 (1.25)	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%
30歳代	男性	400	193	193	35.49 (2.70)	90.7%	1.6%	0.0%	7.3%	0.5%	
	女性	400	225	193	35.16 (2.87)	73.6%	18.7%	0.0%	6.2%	1.6%	
50歳代	男性	400	216	193	54.78 (2.72)	86.5%	2.1%	0.0%	9.3%	2.1%	
	女性	400	264	193	53.80 (2.69)	61.1%	30.1%	0.0%	6.2%	2.6%	
70歳代	男性	400	246	193	73.74 (2.63)	29.0%	2.1%	0.0%	66.8%	2.1%	
	女性	400	275	193	73.41 (2.51)	14.0%	60.1%	0.0%	22.8%	3.1%	
計		3200	2000	1544	45.96 (20.07)	44.4%	14.3%	25.0%	14.8%	1.5%	

注) 最少有効回答者数の30歳代男性に揃え各群193名を乱数生成によって抽出した。

令和2年国勢調査と比べて、やや無業者が多め。

